

染谷家土蔵の鬼瓦

1. 解体直前の染谷家土蔵（平成23年1月）



平成23年1月16日に日光街道側から正面を写す。2日後に解体する。

2. 染谷家土蔵の鬼瓦



梅鉢紋のついた秀作の鬼瓦（鬼瓦の内、梅鉢紋のある瓦は高さ36cm、奥行き28cm）



上の写真は、山田家の屋号「山モ」が描かれている巴瓦（軒丸瓦）である。

軒先に見られた。

※影盛は、周りが丸みを帯び、鬼瓦の後ろの部分に影のような部分があることが特徴。元々はこの部分が漆喰で固められていたのを初代鬼源が鬼瓦の一部として取り込んだもの。（高浜市やきものの里かわら美術館 金子 智氏）

染谷家土蔵（越谷市中町七の一五）は、この地に住んで菓子商を営む五代目の山田茂兵衛が、明治四十年（一九〇七）三月九日に建立したものである。屋号は「山モ」である。

その後、昭和五年に和菓子屋を営む染谷家によって全敷地が引き継がれる。昭和三十年頃からは、日光街道に面した地にそば屋「長寿庵」を営むが、日光街道に面したそば屋の建物がまず取り壊され、次にその裏にあった土蔵が平成二十三年一月十八日に取り壊された。

染谷家土蔵の屋根の鬼瓦は、愛知県高浜村の鬼瓦職人、初代「鬼源（おにげん）」による秀作で、初代鬼源によって考案された「影盛」（かげもり）※と呼ばれる周りが丸みを帯びている形式の鬼瓦である。初代鬼源の優れた明治の遺作としては貴重と言えよう。

正面には、山田家の家紋「梅鉢」が見られる。

3. 染谷家土蔵の巴瓦



「山田」と書かれた巴瓦とその後ろの梅鉢紋のついた鬼瓦



梅鉢紋の瓦の上部にある刻銘

別	(出山の一)	無
段	加田文仕入	類
御		請
詔		合

鬼源

巴瓦（右写真）の上部に見られた刻銘の解読文



刻銘が刻まれた巴瓦（染谷隼生氏保管）

奥行き 2.4 cm、「山田」と書かれた表面の直径は 2.4 cm

写真は、三州瓦の産地で有名な愛知県の高浜村の鬼瓦職人の「鬼源」の作の巴瓦である。明治四十年三月頃、染谷家の前の代の所有者である五代目山田茂兵衛が購入したもので、鬼瓦の直下の屋根に置かれるが、写真の巴瓦は予備として染谷家に保管されてきたものである。刻銘が刻まれているので、鬼瓦と巴瓦の出所が判明することができた。東京で瓦の間屋を営んでいる加田文（屋号は出山の一）の仲介によって、遠く愛知県から帆船で送られてきたのであろう。

「鬼源」（愛知県高浜市春日町3-8-8）は、明治の中頃に創業した三河の鬼瓦職人で、初代鬼源の本名は神谷（かみや）源之丞といい、後に春義（はるよし）と改める。鬼源の鬼は鬼瓦から、源は源之丞からとって、名付けたものである。この高浜では最も古くから続く鬼瓦職人である。

その後を継いだのが二代目勝義で、現在でも三代目と四代目の博基、岩根によって手造り鬼瓦が営まれ続けられている。

なお、染谷家土蔵解体後の一対の鬼瓦は、一つは、越谷市教育委員会で保管し、もう一つは、コンクリート製品を営んでいる染谷隼生（としお）氏（越ヶ谷3-2-11）によって保管された。染谷隼生氏は、越ヶ谷新町3-5-9にかつてあった萬寿屋呉服商の鬼瓦も収集して保管している。



染谷家土蔵の屋根（南側の越谷産業会館3階より撮影）



向かって左は染谷精志氏

平成23年2月8日

文責 NPO法人・越谷市郷土研究会 加藤幸一

※「鬼瓦」に関する文献の紹介

「鬼師の世界―黒地：神谷春義・岩月仙太郎系（1）」（愛知大学教授高原隆著）

愛知大学の高原隆氏の2004年『文明21』12号、愛知大学国際コミュニケーション学会『鬼板師―日本の景観を創る人々』（愛知大学教授高原隆著）

愛知大学総合郷土研究所ブックレット18、2010年